パースにおける論理的なもの

——パース研究 (1)——

西 勝 忠 男

目　次

1. 哲学者パース
2. 探究の論理＝批判的科学精神
3. アブダクションの論理＝創造の論理

1. 哲学者パース

(1)

チャールズ・サンダース・パース Charles Sanders Peirce (1839～1914) にとって哲学とは何であったのか，むしろ何が哲学とよぶに価するものであったのか，ということからこの小論をはじめたいと思う。ということは，周知のように，哲学的思索とよばれるものは，他の学問とは著しく性質を異にしていて，他の学問では当然のこととされてそれなしには一歩も進めず，なんら問われる必要がないとされるような前提——仮定——をも俎上にのせ，絶えざる批判にさらさなければならないということ，自己自身のよってたつ基底の探究なしには哲学とよべないという伝統に深く根ざした本性をもっていることによるのである。

このことを哲学とは「無前提の学」であると表現することもできるであろうが，文字通り前提がないということではなく，前提を問いつめていってそれが何であるかを明らかにすること，云いかえれば，前提とされている立言の意味を問うことなのである。また，立言がどのように用いられているかという用法

を問うことだと言ってもよかろう。それゆえ，哲学が他の学問と区別される特性はそのとりあげる内容，つまり主題ではなく，そのとりあげ方，つまり方法によるのだということをはっきり認めておかなければならない。

しかしここでは哲学論一般を展開することではない。プラグマティズムの創始者として知られてはいるが，真に独創的でしかも多面的な思想家であり，論理学をはじめ哲学のほとんど全分野にわたる重要な貢献をなしとげたことはほとんど知られず，死後半世紀を経た今日になって世界的にますます高く評価され研究されつつあるパースが，その全思想の根幹として「哲学」をどう考えたかということを，まず問題としてとりあげたいのである。

(2)

パスモアの研究によると，パースにとって哲学とは科学であり，科学そのものであったと言われる。[(1)] たしかにパースは哲学を精密科学にしたいという理想をもっていた。[(2)] しかしこのような考え自体はギャリーの言うように，やや陳腐であり，[(3)] 誤解されやすくさえある。哲学が科学そのものだというこの一見トートロジカルな立言の意味は，哲学についても科学についても，たんにその成果を指して言っているのではない。もし哲学も科学も，それぞれ与えられた成果をよりどころとして考えられるべきものだとすれば，いわゆる科学主義者の憧れにもかかわらず，明らかに哲学は科学ではないのであり，さきの立言は事実上偽となる。しかしながら，この立言の意味していることは，明晰で有効な推理や分析の方法を用い，一般に承認されている公的な基準にしたがうという点で哲学も科学と同じ方法で研究されるべきだということなのである。それゆえ，ここには哲学のあり方に対するパースの批判がこめられていることは言うまでもない。

しかし哲学がその方法において有効な結果をもたらすことのできる科学の方法に見ならうべきだとしても，科学の方法がそのまま哲学の方法となるわけではない。哲学は科学とはっきり区別される一線をもつ。それは方法を用いる主体としての人間のあり方にかかわるのである。それはまた問題状況に対する取

りくみ方とかかわることでもある。哲学としては，規定された状況のもとで与えられたものとしての問題を解決するための方法にではなく，現実の問題状況そのものをどう規定し，どうとらえるべきかという価値批判的考察までふくめた方法にかかわるのである。前者を科学的な方法とすれば，後者が哲学的な方法とよべるのである。

「プラグマティズムは方法にすぎない」[(4)]という立言に示されるように，パースが追求した方法はこの哲学としての方法なのであり，科学的意味の，いわば局所的な方法とは異なるより高次な，いわば全域的な方法といえよう。それゆえ，パースが科学の方法として記述しているものであっても，たんなる科学方法論として受けとるべきではない。このことは，かれが1877年から翌年にかけて *Popular Science Monthly* 誌上に「科学論理学の解明」と題して連載した六つの論文のうち最初の有名な「信念の固め方」[(5)]の中で，「この連続論文の目的は科学的研究の方法を述べることである」[(6)]と言っているにもかかわらず，具体的な科学研究法はどこにも述べられておらず，その代り，実在，探究，意味，帰納，偶然，確率，法則など，科学上重要であるのみならず，哲学上もっとも基本的な諸概念についての精力的な論理分析が展開されていることからも知られるであろう。

しかしもっと重要なことは，パースがこれらの概念と取りくむ態度において哲学者としての実践を見ることができるということである。激しい知への情熱と体系への強い関心に支えられたかれは，思想の内的な完全性と包括的な見地をめざして，学究生活五十年にわたり，たえずこれらの概念を批判し検討しなおしている。これらの概念によって示される思想はくりかえし修正がほどこされ，多くの新たな註釈が書き加えられて，より深い哲学的内容をもったものに作りかえられているのである。かれにとって「哲学」とは「基本的諸概念の体系的研究」[(7)]であり，その体系の「基礎はどこまでも深くどっしりとすえられねばならず」[(8)]，「人知の完璧なる展望」[(9)]をめざすものであった。

かれはまた，自分の文章に文学的な香気をもたせようとたいへんな努力をしている。しかしそれがためにかえって文体が凝ったものになり，新奇な術語を作

り出し，文意が晦渋になっていく傾向があるのも否めない。とにかく，かれの文章を何度読んでもふしぎな魅力を覚えるのは，かれがすぐれた文学的才能をもっていたことを示す証拠であろう。

(1) John Passmore, *A Hundred Years of Philosophy* (1968) Penguin Books p. 104.
(2) V. 537. パース論文集 (*Collected Papers of C. S. Peirce.* Harvard Univ. Pr. Camb. Mass.) Vは巻数，537はパラグラフ数を示す。以下同じ。なお論文集全8巻をあげておく。
I. *Principles of Philosophy*, II. *Elements of Logic*, III. *Exact Logic*, IV. *The Simplest Mathematics*, V. *Pragmatism and Pragmaticism*, VI. *Scientific Metaphysics*, VII. *Science and Philosophy*, VIII. *Reviews, Correspondence, and Bibliography*. (I ～ VI, 1931～5 : VII, VIII, 1958)
(3) W. B. Gallie, *Peirce and Pragmatism* (1952) Penguin Books p. 40.
(4) V. 464.
(5) V. 358～387.
(6) V. 385.
(7) VI. 9.
(8) I. 1.
(9) VI. 9.

(3)

さて，科学時代とよばれる今日において，哲学的思索のはたす役割はどのようなものであるかが問われなければならない。この問いを真摯にしかも全面的に受けとめて思索するのでなければ，哲学の名に価しないと言えるのではなかろうか。なぜなら哲学的思索とはわれわれ自身が，その限界を自覚しつつ，その置かれた状況から出発して全体的で具体的な展望を求めようとする純粋に知的な衝動——エロース——にほかならないからである。この人間としての本源的な知的衝動なしに，たんに諸科学から持ちだした新奇な断片をよせ集めて，いかにたくみに論理技術的な装いをこらそうとも，それは真の哲学とは縁の遠いえせ学問となる危険を露呈しているだけのことであろう。そこでわれわれのパースにおいてはどうであったかが問われなければならない。

パースは自ら誇って言うようにハーバード大学の著名な数学教授を父にもち[1]，幼時からの訓練によって自然科学的精神を徹底的に身につけ[2]，科学研究によっ

て生活を支えていたのである。しかしながら，なによりもかれは上述の意味における真実の哲学者——科学の哲学者——であった。かれは科学そのものを，かれの広大な関心のもとに登場する他のあらゆるものと同じように，哲学的批判的な立場を通して見たのである。科学の方法そのものが科学のもっとも重要な成果であり，歴史的産物であるとしてとらえ，さらに，科学的に研究するためには方法以上に本質的なものとしては，どこまでも真理を求める科学的精神であるとするパースは(3)，まさに科学を人間精神との関連においてとらえようとする思想家といえるであろう。

哲学は科学と別個に存在しているのでは決してない。しかし，一定の前提を設けてそれを自明のものとして受けとり，その枠の中で没価値的に現実の必要を満すことは考えるが，自分の用いる手続きの理論的根拠についてはまったく無反省な多くの科学者の態度に，かれはあきたらなかったのである。科学は，その枠そのものの一面性の克服という点において哲学化され，哲学はその方法の経験化厳密化という点で科学化されねばならないであろう。哲学と科学との交流の中で思想は真に生き生きとしたはたらきをもつのではなかろうか。思想のない科学，科学のない思想はともにパースにとっては論外であったと思われる。科学から哲学へと連続して織りなされているその思想の緊密さにおいてパースの右に出る人はいない。

パースはまた科学上の多くの困難な問題を論理学の問題としてとらえようとしていることに注意しなければならない。かれにおいては問題を哲学的に扱うとは同時にまた論理学の問題として扱うということを意味したのである。哲学という言葉を正面切って用いず，いわばその代名詞として「論理学」を用いたのである。「哲学」という言葉にまつわる雑多な，しかも反哲学的ともいえるような意味がかれの思想に入りこむことを意識的に避けようとしたためとも思われる。しかも愛智としての哲学の根源的な意味は確保され生かされている。ラッセルが哲学の真髄としての論理学を考えたように，いやそれ以上にパースにおいては論理学は哲学と密着している。「論理」という名辞が出てくる文脈において，この「論理」は決して狭義の専門的術語として用いられているので

はなく，むしろパースの哲学思想の基本的なものを述べるものとしてとられるべきであろう。かれは言う。「“精密”な論理学は“精密な”形而上学への踏み石となるものであることを示すであろう[(4)]」と。つぎにかれの言う論理ないし論理学の哲学的な意味が問われなければならない。

(1) Ⅳ. 229.
(2) Ⅰ. 3.
(3) Ⅵ. 428.
(4) Ⅲ. 454.

2. 探究の論理＝批判的科学精神

(1)

パースは実際上，形式的科学としての論理学の研究と，論理ないし論理学の本性に関する哲学的な考察とをほとんど区別していない。この二つのものの共存の中に，かれの思想が今日においても多くの示唆を与えてくれる貴重な鉱脈がひそんでいると思われる。しかしながら，前者の意味での専門技術的な論理学上の業績は「論文集」の第三巻「精密論理学」と第四巻「純粋数学」に収められていて，数学的論理学者パースの名を高からしめたものであるが，かれ自らが大きな貢献をした19世紀の論理学上のルネサンス以来日進月歩する論理学の現状においては，すでに吸収されて歴史的な興味の対象となっている。それに対して第二巻「論理学の原理」や第五巻「プラグマティズムとプラグマティシズム」その他[(1)]に収められている論理思想は，さまざまなタイプの推論の分析を通して，かれの現象学的なカテゴリー思想とつながり，さらにかれの真に独創的で包括的な記号論の思想へと発展していくものであって，今なおもっとも大きな哲学上の潜在価値をもっているものである。そしてわたしがもっとも興味をもっているものもパースのこの広義の論理学であり，論理の哲学なのである。

パースの論理思想を理解するうえで大切なことは，かれの「論理」が経験論ないし実在論的な基礎の上に立てられているということである。ここではまず

「信念の固め方」*Fixation of Belief* と「概念を明晰にする方法」*How to Make Our Ideas Clear*[2] というとくに著名な二つの論文を手がかりとして考察を進めたい。かれは「科学上の主要な発展段階が，それぞれ，論理学の一課となっている」[3]と言う。ここに科学上の重要問題は同時に論理学上の問題でもあり，科学と論理学とは相たずさえて発展するものであることをはっきり主張しているのである。かれにとって，論理学は推論を研究する学問にほかならず[4]，この推論は「既知の事実を考察することによって未知の事実を発見すること」[5]を目的とするものである。そしてこのような純粋な知識追求の活動が「探究」*inquiry* とよばれる。

この「探究」といういとなみは「疑念が刺激となって安定した信念に到達しようとする努力」[6]であり，これがわれわれの思考のはたらきにほかならない。われわれが信念をもつときにはいつでも特定の仕方で行動できる状態におかれているのであり，これに反して疑念をもつときにはこのような行動はまったくなく，疑念がなくなるまで探究を続けるように仕むけられる。ある場合にある仕方で行動できるようにする信念はまた行動のための規則であり，「われわれの本性のうちに習慣を確立する」[7]ものであると言われる。そしてひとつびとつの推論の仕方をきめる個々の精神の習慣を命題の形に定式化したものが推論の「指導原理」*guiding principle*[8] とよばれる。

このようにして，パースは「探究」という名辞に安定せる信念の追求，さらに習慣の確立という新しい意味づけを行い，これによって，科学といういわば抽象度の高いレベルの活動から，日常生活的思考という身近かなレベルの活動に至るまで，すべて人間の愛知の活動として包括的にとらえることができるように意図したのである。かれはこのような探究活動こそがまさに論理的動物としての人間のいとなみの本性であることを力強く主張するのである。パースのこの論理概念は，しかしながら，かれがもっとも尊敬していた哲学者の一人であり，三年以上もの間毎日二時間ずつ研究し，遂に全巻ほとんど暗記するまでになった[9]「純粋理性批判」の著者カントの，「あらゆる経験から独立な」アプリオリな論理法則という考え方とはまったく対照的なものであって，生物学や

心理学などの経験科学によって裏打された新しい論理概念ということができるであろう。

(1)「論文集」の巻名については前章(2)節，註(2)にあげた。
(2) V. 388～410.
(3) V. 363.
(4) V. 358.
(5) V. 365.
(6) V. 374.
(7) V. 397.
(8) V. 367.
(9) I. 4.

(2)

パースは科学の論理構造と日常的経験のそれとの類似性をしっかりとらえてはなさない。安定せる信念を追求する推理作用としての探究の過程そのもののうちにこの類似性をはっきり認めることができる。科学的な研究は不要な要素の除去 *elimination* という方法を用いることによって進められるのであるが，かれの言葉で言えば，われわれの信念をたえず観察や実験というテストにかけるということである。いわゆる検証というかたちで事実どおりでないもの，誤れるものをふるいにかけ，棄てていくのである。そのような検証に耐えて一時的にもせよ揺らぐことのない信念が求められる。科学と同じように，日常生活においても，われわれは現実の「経験」というテストを通してともすれば肥大しがちな希望や抱負をたえず縮小させている。「経験」はわれわれの考え方をむりやりに変えさせてしまう力をもったものなのである。(1) にもかかわらず，われわれの楽観的な傾向は根絶されることはない。われわれは希望のうらづけとなる事実がなくても幸福であり，自己満足するようにつくられているらしいとかれは言う。この意味において人間は完全に論理的な動物ではないのである。(2)

人びとは不安定な精神状態，つまり疑念にとらわれることをおそれ，これを本能的に避けようとして，さまざまな仕方で信念の安定化を強く求める。パースはこれを四つの方法に分類する。自己中心的な願望にもとづく『固執の方法』

Method of Tenacity, 公認の考え方に従わせようとする『権威の方法』*Method of Authority*, 好みにかなったものを理性的とする『先天的方法』*A Priori Method* の三つは，それぞれ心理的，社会的に固有な長所をもってはいるものの，これらはみな事実とは無関係な人間的，主観的なものにもとづいており，これらの方法の帰結が客観的事実と合致するという理由はなにもない。したがって，それらの方法によって確立された信念はやがて決定的な破算をみることであろう。パースは言う。「結局，われわれは自分の思想を事実と合致させようと望んでいるのであり，『科学の方法』*Method of Science* のみがこの事実との合致をなしうる特権をもつのである。」(3) ここでは主観的恣意的なものによってではなく，『公的なもの』*something public*,『外的永遠性』*external permanency* をもったものとして信念が確定される。このようにパースはわれわれ人間の信念という主体的精神的なものを客観的な科学の方法の実践と結びつけ，人間の認識として統一的に把握するのである。したがってここに言われる科学の方法は観察実験上の諸規則などではなく，哲学的に考察されたものであることは明らかである。

この科学の方法によって「すべての人の究極の結論が同じものになる」(4) のであり，さらに「すべての科学研究者が究極的には賛成するようにあらかじめ定められている意見こそ，われわれが真理として意味しているものであり，この意見によって表現された対象こそが実在なのである。」(5) パースはこのように「真理」や「実在」を安定せる信念によって定義する。ここで注目すべきことは，われわれの意見にはまったく依存しない実在の事物があること，そして実在がわれわれの感覚に作用を及ぼし，われわれは推論によって事物の本当の姿を確かめることができるということ，このことをかれは科学の方法の基本的な仮説として提起し，この仮説が探究の唯一の支えであると言っていることである。(6)

「科学の方法」によって客観的な真理をとらえることができるとしても，真理への探究過程そのものは，たえずわれわれの信念ないし意見の検証をくりかえしながら進んでいくものであって，真理への漸近にすぎず，実はたいへん不安定なものでもある。この意味で「探究」概念は決して静的に固定した概念でなく，動的な過程とみられなければならない。エヤーが，ジェームズやデューイ

もふくめたプラグマティズムの特徴をダイナミックな変革の哲学として強調していること[7]は正しいことである。

(1) I. 321.
(2) V. 366.
(3) V. 387.
(4) V. 384.
(5) V. 407.
(6) V. 384.
(7) A. J. Ayer, *The Origins of Pragmatism* (1968) p. 15.

(3)

1898年の「論理学の第一則」と題する講演の中でパースは次ぎのように言っている。

「どんなタイプの探究であっても，どこまでも実践されるならば，遂には生命力をもつようになって，自己自身を修正し生長していくものであります。この性質は深くしみ通って探究の奥深い本性となっているものであります。真理を知るために必要なものといえば一つしかない。それは真なるものを知ろうとする愛情のこもった積極的な欲求だけだといえましょう。もしみなさんが本当に真理を知ろうと思うなら，どんなに探究の道が曲りくねっていようとも，遂には真理の大道へと導かれていくでありましょう。はじめのうちはどんなに間違った思考法をとっていようとも，みなさんの実践が真摯な欲求によって動かされているかぎり，必ずや誤りは正されるでありましょう。」[1]

この言葉に見られるように，パースの真理観はまことに科学者的でありまた倫理的である。探究はこのような論理的良心によって支えられているのである。論理的良心とは何か。それはどこまでも客観的事実に従って自己の誤れる信念を批判し修正していくという科学的精神である。

こうした科学的精神は，かれが誤謬主義 *fallibilism* の原理と名づけているものでもある。われわれの知識についてのあらゆる主張は決して誤まりをまぬがれることはできず，経験の流れの中でたえず批判され修正されうるものであ

る。科学の方法による信念の確定は，他の方法によるものにくらべて客観的証拠にもとづいている点においてすぐれてはいるが，決して絶対的なものではない。科学上の成果を絶対視することは笑止千万なことである。この原理から私の哲学が成長したように思えるとパースは告白するのである。(2)

論理的良心をもつことは，かれの云うように何ものかを失うことでもある。しかし失ってもなお余りある大切なものが得られる。それは個人的思想の限界を自覚し，これを超えた客観的社会的な基準へと導かれていくことである。『科学の方法』は科学者個人の頭脳からひねりだされたものでなく，歴史的な産物であり，しかも真理は多くの科学者からなる研究共同体によって漸近的に達成されるものだという認識こそ基本的に大切なものなのである。科学というものは，その推論活動において日常生活におけるわれわれの推理と本質的に異なるものではないが，特殊な探究の論理を用いる研究者の社会的ないとなみであって，この探究過程において人間としてもっとも貴重な徳性が涵養されるのである。

パースは言う。

「人間は決して個人的な存在ではない。人間の思考とは自己への語りかけである。言いかえれば，たえず心の中にあらわれてくるもう一人の自己との対話なのである。人が推理する時には，かれが説得しようと試みているのはそのもう一人の批判的な自己に対してなのである。いかなる思考もすべて記号であり，それゆえたいていの場合言語としての本性をもっているのである。(3)」

この言葉は晩年の1905年『モニスト』*The Monist* 誌上に発表されたものであるが，ここに見られるヘーゲル的な，意識の弁証法的発展に似た叙述は別にしても，思考は内的な対話であり，対話が有効に行われるための基準として社会的なものが前提されていることは明らかである。

われわれは言語という記号を用いて思考する。なんらの記号も使わないで考えることは不可能である。パースは，思考や知性さらに精神ということでわれわれが意味しているものは「推論の法則に従って展開する記号」(4)であるとみなしている。この記号が社会的な存在物であることは言うまでもない。人間の思

考を，さらには人間そのものを，記号の連続的な系列としてとらえようとするパースは，アリストテレス以来の社会的動物としての人間観に，記号的動物としての意味を新たにつけ加えたということができるであろう。

(1)　V. 387.
(2)　I. 14.
(3)　V. 421.
(4)　V. 313.

3.　アブダクションの論理＝創造の論理

(1)

以上，科学の論理としての探究の論理を述べてきたのであるが，この探究の論理は狭義の論理学的見地，すなわち演繹論理から見れば誤りであることは明らかである。演繹論理学的に言えば，既知の事実から未知の事実など出てくるわけはない。妥当な演繹的結論に出てくるものは前提にふくまれてあるものだけである。しかしながら，演繹論理そのものは事実を扱うものではなく，演繹的推論の法則はなんら事実的な情報にかかわりえないのである。したがって，事実と論理とが複雑にからんだ認識問題をとりあげる場合，演繹論理自体はほとんど無力である。演繹的推論の典型は数学に見られるが，探究としての推論は事実を扱う科学研究や日常のまじめな実践の中に見ることができる。したがって演繹論理のみを通して科学を見ることは決して正しい理解にはならない。科学研究の中へ数学的手法を無反省にもちこむことはペダンティックな自己満足にすぎない。演繹論理では認識を深める探究活動の一面しかとらえられないからである。

パースは「推論の妥当性の問題はまったく事実に関する問題であって，たんなる思考に関する問題ではない[(1)]」と言っている。この立言は，探究は事実にもとづく推論であって，たんなる演繹論理ではないと読みかえることができる。演繹的形式論理学の狭さを克服する論理が必要となる。結局，探究とは事実と人間精神との関係を扱う認識の問題なのであり，認識する精神の本質的作用が

推論なのである。[2] したがって，このような問題については二つの側面から考察が進められなければならないであろう。かれはこれを，一つは「事実」とよばれているものの分析によって，もう一つは推論の論理構造の究明によって行っている。前者については，あらゆる事物の中に存在する三つの要素として，現象学的な三つのカテゴリーが主張される。例によってパースは多様な述べ方をしているが，直接経験であり独立な存在としての第一者 *Firstness*, 行動であり他者との関係としての第二者 *Secondness*, この二者を関係づける思考であり習慣としての第三者 *Thirdness* が区別される。しかしながらこの小論ではカテゴリー論を措き，後者の推論の論理構造に注目して議論を進めたい。

科学には三種の基本的な推論，すなわちディダクション *Deduction*（演繹），インダクション *Induction*（帰納），リトロダクション *Retroduction*〔仮説またはアブダクション *Abduction*（仮説形成）が多く用いられる〕があるとパースは言う。[3] これら三つの推論が科学的探究の過程の中でどのように相互に関連をもちながら展開されるのであろうか。図式化して考えてみよう。

探究は研究者にとって疑念をいだくような予期しない事実（現象）が立ちあらわれた時にはじまる。かれはこの現象に思いをこらして説明しようと試み，仮説が提起される。これが探究における第一段階としてのアブダクションである。[4] 次ぎに，この仮説が真であるとするならばどのような帰結が導かれうるかの分析がなされる。[5] これがディダクションの段階である。こうして導きだされた帰結が果して正しいものかどうかのテストがなされ，その結果が観察される。[6] これがインダクションである。これで探究のサイクルは一応閉じられるのであるが，ここでの観察結果が仮説＝演繹的説明とは異なるもの，つまり期待に反するようなものであれば，再び探究が開始されることになる。

（1）　V. 365.
（2）　II. 444 n.
（3）　I. 65.
（4）　VI. 469.
（5）　II. 623.
（6）　II. 755.

(2)

このように，三つの論理的推論が探究過程の中に組みこまれ，思考対象である事実をめぐって，疑念から信念へと推移する人間精神の主要な活動様式として統一的にとらえられていることは[1]，パース科学論のすぐれた点であると思われる。ごく初期（1968年）の論文「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」*Some Consequences of Four Incapacities*[2]においても，人間の精神作用に対応する推論として，感覚 *Sensation* を仮説的推論[3]に，注意 *Attention* を帰納的推論[4]にそれぞれ対応させ，さらに知性 *Understanding* を演繹的推論にあたるもの[5]としている。また，後の1878年に発表した「演繹，帰納，仮説」では，仮説は思考の感覚的要素を，帰納は習慣的要素を，さらに演繹は意志的要素を生み出すということが言われている。

このうち演繹推論はなにも新たな知識を生み出すものではなく，既知のものや仮説的推測をよりはっきりしたものにするだけである。しかしながら，演繹推論に対するパースの見解はすぐれたものである。かれは，前提が真であれば結論は必ず真だという演繹推論の必然性から，いかなる命題も本質的には「……ならば～」という形式をとる条件命題として表わせることを洞察している[6]。また，演繹推論はすべて数学的推論の本性をもち，したがって図式的であることが指摘される[7]。演繹が説明的 *explicative*, 分析的推論とよばれるのに対して，仮説形成（アブダクション）と帰納とはともに拡充的 *amplifiative*, 綜合的推論とよばれる[8]。パースのもっともすぐれた論理学上の貢献はこの仮説と帰納に関するものであるが，既知から未知への探究の論理はまさにこの拡充的推論なのである。

「拡充的・綜合的」推論である帰納的推論と仮説的推論との特性を調べるためには両者を対照してみなければならない。もちろん，この二つの推論は人間の思考，つまり探究過程において複雑にからみあっており，パースの多様な叙述は明快ではないのであるが。帰納とは，観察事実に類似の事実は検討しなくても真であると結論する推論であり，仮説とは，観察事実とはまったく異なる事

実の存在を結論する推論であるから，前者は分類し，後者は説明するとパースは言う。[9] このからみあいをもう少し考察してみよう。

帰納は一般に長い目でみて真理に導くにちがいないという方法をとるから，その結論を漸近的なものとみる推論である。[10] 帰納はまた，サンプルにもとづいて仮説を評価しテストするのがその任務であるが，この場合，正しいサンプリングがなされるためには，決してまったく任意にではなく，予め指定された観点に立ってなされることが必要なのである。パースは帰納の法則として次ぎのように論じる。「ある集合からアトランダムにえらんだサンプルに示される予め指定された性質はその集合全体においてもほぼ同じ頻度であらわれるとする推論が帰納なのである。」[11] あるサンプルにもとづく仮説が真なら，別の類似の状況のもとでもこのことが観察されるであろうし，実験するならば，そのような結果がみられるであろうとする推論は明らかに演繹である。したがって，これら三つの推論は探究過程において相互に密接な関連をもち，全体として形式論理学の枠をこえていることに注目しなければならない。

われわれは演繹と帰納という二つの論証形式があることを知っている。前者は前提が真なら結論も真ということは保証するが，事実的内容には触れない分析的必然的推論であり，後者はそのような保証はしないが，前提は結論の裏づけに役立つ経験的蓋然的推論である。この二つのほかに論証形式として成立しうるものがあるのであろうか。まず形式論理学的な根拠を求めてみよう。論理学者の主たる任務は論証形式を分類することにあるのだから。[12]

パースはこの根拠をまず三段論法の形式にあてはめてみようとしている。演繹的三段論法は規則（大前提）と事例（小前提）とから結果（結論）を導きだす推論であり，事例と結果とから規則を導きだすのは帰納推論で，規則と結果とから事例を導きだすのは仮説的推論であるとしている。[13] そして帰納は第三格，仮説は第二格にそれぞれ対応させている。しかしながら，とパースは言う。[14] 第一格に対する第二・三格の関係と，演繹に対する帰納及び仮説の関係とはまるきり違ったものであり，蓋然的推論に演繹的推論の規則はあてはまらないのである。

(1) Ⅵ. 144.
(2) Ⅴ. 264～317.
(3) Ⅴ. 291.
(4) Ⅴ. 296.
(5) Ⅴ. 298.
(6) Ⅲ. 440.
(7) Ⅴ. 147～8.
(8) Ⅱ. 680.
(9) Ⅱ. 636.
(10) Ⅰ. 67.
(11) Ⅵ. 409.
(12) Ⅱ. 619.
(13) Ⅱ. 623.
かれは次ぎの実例を用いる。規則は「この袋からとり出された豆はすべて白い」。事例は「これらの豆はこの袋からとり出された」，結果は「これらの豆は白い」である。
(14) Ⅱ. 631.

(3)

さて，上述のように，観察（経験）と類似の事実を推理する帰納に対して，観察とは異なる事実を推理する仮説的推論（アブダクション）とはどのようなものであろうか。パースの言うところを聞こう。

「帰納は新しい概念をなにも創りだせない。演繹ではもちろん不可能である。科学上の概念はすべてアブダクションによって生みだされる。アブダクションこそ事実を学び，事実を説明する理論を案出するのである。」(1)

このアブダクションの定式化は次ぎのようになされている。

(1) 驚くべき事実Cが観察される。
(2) もしAが真ならばCは当然のこととされるであろう。
(3) それゆえ，Aが真ではないかと思うことには根拠がある。(2)

プラグマティズムの問題はアブダクションの論理の問題にほかならないと言われ，(3) また歴史は直接観察の事実でなく記録にもとづくものであるから仮説の本性をもっていると主張されている(4)ことなどをみれば，パースがどれほどこ

の推論を重視しているかがわかる。まさにワイスの言うように創造的過程の論理なのである。[5]

しかしこの定式を形式論理学的にみればどうなるであろうか。この場合生々とした感覚的事実にもとづく微妙な表現の特質をすべて無視せねばならない。仮言的三段論法の型で記号化してみると，

$$[(q \supset p) \cdot p] \supset q$$

となる。この式は後件肯定の虚偽をおかしていることは明らかである。演繹論理としては仮説qと経験事実pとの間にはなにも必然的な関連がないのである。しかしながら，演繹そのものは状況などにはまったく無関係になされる推論であって，その意味では，任意にしかも必然的になされるものではあるが，事実問題については本来扱う権利はないことを思いおこすべきである。仮説は事実から演繹されるのではないのであって，科学的発見においては，演繹はせいぜい発見された事実に対する理論づけを論理的に整合に跡づけできるにすぎない。

事実問題としてわれわれはどのように仮説を構想しているのか。このことをこの定式が表現しているのである。第一前提は経験的事実を示している。事実に対するみずみずしい驚きの心，すなおな好奇心が出発点であり基本なのである。鋭敏な感性のないところに発見や創造はない。事実Cからまったくこれと無関係な仮説Aを思いつくのは一種の知的直観であり，[6] このCとAとの関係は心の構成物であるといえる。実際の発見においてわれわれはCからAへ直ちに飛躍するのであって，第二前提のまわりくどい論理的表現は不要と思えるかもしれない。しかしながら，いかに自由奔放な空想でもありうる仮説を，論理の世界にひき入れて検証できるようにチェックしようというのが第二前提なのである。このように，経験と論理とがアブダクションの推理過程において，つまり科学の方法の実践において，結びつけられている。しかしこの第二前提は一応の関門を設けるだけであって，アブダクションの本質は，結論に見られるように不可解な事実の理解にあるのであり，まさに，事実への解答を迫る問いかけなのである。そしてこれによってのみこの推論が正当化されるのである。[7]

(1) V. 145.
(2) V. 189.
(3) V. 196.
(4) VI. 606 n.
(5) Paul Weiss, *The Logic of the Creative Process.* Studies in the Philosophy of C. S. Peirce (1952)
(6) V. 341.
(7) V. 145.

(付記) 予定した蓋然的推理（確率論）及び法則の問題については次回にまわすことにする。